

京都の天文学【3】 安倍晴明が出会った天変

臼井 正（京都学園大学）

1. 陰陽道と陰陽寮

陰陽道は、中国の陰陽・五行説をもとに日本で成立した呪術と占いの体系です。陰陽寮という官庁名が最初にみえるのは、『日本書紀』の天武天皇四（675）年正月の記事ですが、陰陽道という言葉は中国には無く、日本でも平安時代中期から一般化した言葉です。陰陽道は陰陽・五行説の他に道教（中国の民間信仰）、密教、風水思想など色々な要素が融合して成立しました。そこで、陰陽寮は陰陽道をするために設けられた、というより、陰陽寮は陰陽道の成立の場だった、という方が実情に近いようです[1]。

陰陽寮は中務省（なかつかさしょう）に属し、陰陽博士、暦博士、天文博士、漏刻博士などで構成されていて、彼らはいってみれば技術系の国家公務員でした。平安時代中期までは、陰陽寮にも家柄を問わず優秀な人材が集められましたが、藤原氏の専制によって社会が停滞してくると、賀茂氏・安倍氏が台頭し、しだいに天皇や公家に対して私的な奉仕もするようもなりました。

今回は、こうした陰陽師の第一人者である安倍晴明と天文との関わりについてお話します。

2. 花山天皇の退位事件

晴明が活躍した平安時代中期に政治権力を独占していたのは藤原氏でした。その支配のパターンは、自分の娘を天皇や皇太子に嫁がせ、そこに生まれた子が天皇になったときに、天皇が幼いときには摂政、長じてか

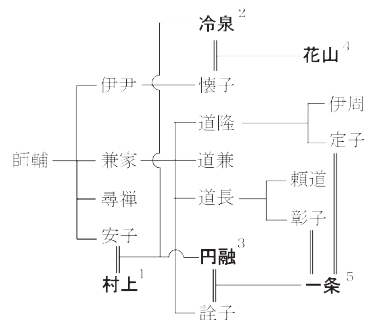


図1 天皇家と藤原氏の関係系図。
ゴシック文字が天皇で、数字は即位の順番を示しています。

らは関白として政治の実権を握る、というものです。しかし、同時に藤原氏内部で肉親どうしの権力闘争が激しさを増していきました。

第65代花山天皇は第64代冷泉天皇の第一皇子で、永観二年(984)に十七才(以下、年令は全て数え年)で即位しました。花山天皇は寵愛していた女御(にょうご)が即位の翌年、懐妊から7か月のちに

十七才の若さで亡くなってからは、悲嘆にくれて出家さえ考えるようになりました。そこに目をつけたのが藤原兼家とその子の道兼らで、彼らは花山天皇を退位させ、兼家の娘と円融天皇の間に生まれた皇太子を天皇にしようとしていました(後の一条天皇;図1)。ついに、寛和(かんな)二年六月二十二日(以下、漢数字は当時の暦。ユリウス暦では986年7月31日に当たります)の深夜、父親の意をうけた道兼は、自分も一緒に出家するからといって花山天皇を御所から誘い出しました。そして、花山のふもとの花山寺(元慶寺(がんぎょうじ)の別名)に向かい(図2)、そこで天皇が髪をおろすのを見とどけた道兼は口実をもうけて引き返してしまいます。こうして陰謀は成功して、新たに一条天皇が即位したのです。その後、一条天皇の後妃である彰子(しょうし)には紫式部が、定子(ていし)には清少納言が仕え、宮廷文学が花開くこととなります。

『大鏡』には、この出来事を安倍晴明が天文観測によって知った、という話があります。この夜、花山天皇は有明の月が明るいので目立つのではないかと躊躇していましたが、道兼は既に宝玉と宝剣(三種の神器のうちの2つ)を皇太子に渡してしまった、と言ってせかしました。やがて月に雲がかかってきたので、天皇は「自分の出家もこれで成就するのか」と思っ

こうして道兼公と天皇が土御門通を東へ向かっていた時、安倍晴明の家の前を通り過ぎましたが、晴明自身の声がして手を激しくばちば

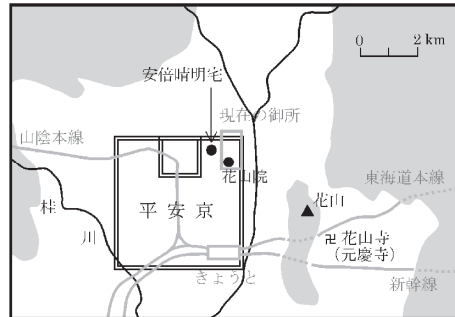


図2 京都の関係地図。グレーの文字は現在のもの。

ちと打ち、「天皇がご退位されたようだ。ご退位を示す天変が現われたが、もはや事は定まってしまったらしい。すぐに参内し奏上しよう。早く車の支度をせよ。」と言う声がしました。それをお聞きになった天皇は、たとえ覚悟の上とはいえ胸を打たれたことでありましょう。清明が、「とりあえず、すぐに式神一人、宮中へ参上せよ。」と命じたところ、人の目には見えぬ何物かが、戸を押し開けて天皇の後ろ姿を見たのでしょう、「ただ今ここをお通りになったようです。」と答えた、ということです。清明の家は土御門町口（まちぐち）でありますから、ちょうど道筋に当たっていたのです（[2]を一部改変）。

この夜、安倍清明が見たという天変の正体についてはいくつかの考察があります。斎藤[3]は天文計算の結果、この夜、歳星（木星）と氐宿の距星（てんびん座アルファ星）が0.5度まで接近していたことに気づきました。古来、2天体が7寸（0.7度）以内に接近することを「犯」とよんで凶事の予兆としていたことから、数日前から木星がてんびん座アルファ星に近づきつつあるのを見て天皇の退位を予想していたのだ、としました。一方、栗田[4]は、天皇が出発した時には木星は既に西に沈んでいることと、この夜に昴の星々が月に隠される別の天変があったことから、木星とてんびん座アルファ星の接近で得た天皇退位の予想が、昴の食で確信に変わった、と考えました。

作花[5]は、清明は慎重な天文博士だったという栗田と同様の解釈の他に、清明はこのクーデターの加担者だったかも知れないと推理しています。つまり、ベテラン観測家の清明はすでに数日前から木星の犯が起こることも昴の食が起こることも予知していた。彼はこの2つの天変が二十二日の夜起こることを天皇に奏上すべきなのに、藤原兼家・道兼父子に密告した。彼らは大喜びで、帝に退位を強く勧めた。帝も星のお告げならやむなしとしぶしぶ出家を決意した。清明は予報が両方とも当たったのを確認して、帝がすでに退位してしまってから役職上の義務として内裏へ報告に行こうとした、というものです。ただ、花山天皇退位の事件そのものは色々な歴史書に記されているものの、清明が登場するのは『大鏡』のみで、真相は歴史の闇につつまれています。

天変の正体と清明の関与はともかく、退位した花山上皇は、風流三昧の生活を送り、寛弘五年(1008)、四十一才でその生涯を閉じました。花山上皇

は、藤原伊尹（これただ：図 1 参照）の娘が住んでいた花山院（現在の京都御所の中：図 2 参照）に通ったことから、こう呼ばれることになったもので、現在天文台のある花山とは関係ないようです。平安時代中期以前の天皇号は、生前の天皇の業績をたたえた諡号（しごう）ですが、律令政治が崩れてからは、譲位後の御在所などが追号として用いられるようになりました。花山天皇もかつては花山院天皇と呼ばれ、現在の呼び名になったのは大正時代以降のことです。また、元慶寺は中世には衰微しましたが、江戸時代に再興されて今に到っています（図 3。現在は「げんけいじ」と読んでいます）。



図 3 現在の元慶寺。右奥が本堂。

3. 安倍晴明はハレー彗星を見たか？

永延三年(989)の六月に突然、彗星が現われました。現在ハレー彗星と呼ばれているこの彗星の記録は日本や中国に残っていて、『日本紀略』には「六月一日庚戌、其日彗星東西天に見（あら）はる」（六月一日はユリウス暦で7月6日にあたります）、「七月中旬、連夜彗星東西天に見はる」とあり、別の記録では尾の「長さ5尺（5度）ばかり」とあります[6]。

天変が起きると大赦や寺社でのお祈りが行われましたが、その中でも彗星の出現は特に恐れられていました。この時も六月七日に「伊勢以下十一社奉幣」とありますが、それだけでは済まず、『扶桑略記』に「永延三年己丑八月八日、改めて永祚（えいそ）元年と為す、彗星天変に依るなり」とあるように、何と改元が行われたのです（『日本紀略』には「彗星天変地震の災異を攘（はら）う」とあるように、改元理由は史料によって異なる場合があります）。当時は一年の途中で改元された場合でも、遑ってその年のはじめから年号が変わるので、正式には永祚元年六月にハレー彗星が出現したことになります。

飛鳥時代から平安時代初期にかけては、めでたい雲が見えた（慶雲：704～708年）、白い亀が現われた（宝亀：770～780年）というように瑞兆によって改元する、という例もありましたが、平安時代中期からは天変や地

災（地震や洪水など）を理由にして改元する場合があります。当時は2～3年で改元を繰り返していて、永祚二年には再び改元され正暦（しょうりやく）元年となったように、改元自体は珍しくないものの、「彗星出現により」と明記されている点が注目されます。

安倍晴明は、ハレー彗星による永祚改元の時には69才でした。『日本紀略』には、この年の二月十一日に皇太后詮子（せんし）の気分がすぐれないので、円融法皇が天台座主尋禪に尊勝法を、安倍晴明に泰山府君祭を行わせた、とあるように、晴明はこの年も陰陽道の第一人者として活躍していました。ただ、晴明とハレー彗星を直接結びつける史料は残されていません。しかし、彗星の出現というような重大な天変について、晴明が無関係でいたとは考えにくいでしょう。もちろん改元そのものを決めたのは道長をはじめとする有力者でしたが、晴明は果たしてハレー彗星を見たか、見たとすれば何か占いをしたか、そしてその占いが改元に何らかの影響を与えたのか、と想像するだけでも楽しいです。

彗星出現によって改元した例は、他にも承徳（じょうとく；1097～1099）、嘉承（かしょう；1106～1108年）、天永（てんえい；1110～1113年）、久安（きゅうあん；1145～1151年）などがあります（主に[6]によった）。久安の彗星もハレー彗星で、永祚改元の時から2回後の回帰です。又、鎌倉時代の土御門天皇が承元四年(1210)に譲位したきっかけは彗星出現だった、という記録も残されています。この時代には彗星の出現が何度も朝廷を揺るがし、それが改元や天皇譲位という形となって歴史に残されているのです。

この項は、「陰陽道が恐れた星々」（作花・福江編、2006、『歴史を揺るがした星々』、恒星社厚生閣に所収）に加筆修正を加えたものです。

参考文献

- [1] 鈴木一馨、2002、『陰陽道』、講談社
- [2] 橘健二校注・訳、1986、『大鏡（一）』、小学館、p.37
- [3] 斉藤国治、1997、『天界』、871巻、pp.6-9
- [4] 栗田和実、1998、『天界』、873巻、pp.1-4
- [5] 作花一志、<http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/monogatari.htm>
- [6] 神田茂、1935、『日本天文史料』、原書房